国際比較調査のデータ分析の課題と展望
――「宗教意識調査」を事例として――

青山学院大学　真鍋一史

Ⅰ　目的

国際比較調査（cross-national comparative survey）のデータ分析の方法論的な問題点について検討する。そのため、「国際社会調査プログラム（International Social Survey Programme: ISSP）」の 1998 年と 2008 年の「宗教モジュール調査（Religion Module Survey）」、および筆者自身による 2007 年と 2008 年の「日本とドイツにおける価値観と宗教意識調査（The Survey on Values and Religious Consciousness in Japan and Germany）」を事例として取りあげ、データ分析の問題の所在を明らかにするとともに、その解決の方向を探る。

Ⅱ　国際比較調査のデータ分析の問題点の事例

1「国際比較（cross-national comparison 」か、それとも「比較地域／社会／文化（cross-regional/societal/cultural comparison）　」か？
2「%の記述（description）」か、それとも「意味の探究（inquiry into the meanings）」か？
3「デノミネーション（denomination）」か、それとも「信仰（faith）」か？
4「量的調査（quantitative survey）」か、それとも「質的調査（qualitative survey）」か？
5「質問項目（question item）」か、それとも「次元（dimension）」か？
6「記述（description）」か、それとも「分析（analysis）」か？
7「木を見る（looking at the trees））」か、それとも「森を見る（looking at the forest）」か？
8「因果（causality）の法則」か、それとも「構造（structure）の法則」か？
9「仮説検証（hypothesis-testing）」か、それとも「仮説探索（hypothesis-exploring）」か？
10「測定モデル（measurement model）」か、それとも「因果モデル（causal model）」か？

Ⅲ　展望

本報告では、国際比較調査の方法論的な問題を、「宗教意識調査」を事例として取りあげ、具体的に検討してきた。しかし、ここで議論してきた 10 の問題点は、何も「宗教意識調査」に固有の問題点というものではないであろう。そうだとするならば、「宗教意識調査」以外のさまざまなテーマについての「国際比較調査」においても、これらの問題点は同じように指摘されることになるであろう。質問紙法にもとづく多数の国ぐにを対象とする大規模な国際比較調査は、今後、さらなる増加の方向に進むとしても、それが減少の方向に転じるとは予測しにくい。同時に、それと足並みをそろえて、そのような調査のデータ・セットを利用する、いわゆる「二次分析（secondary analysis）」の試みもさらに増加していくものと考えられる。こうして、ここにあげた問題点の確認とその解決の方向の模索は、ますます重要な課題となってくるといわなければならないのである。

文献

Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史（2013a）「国際比較の視座からする宗教性の類似性」『関西学院大学社会学部紀要』第 116 号.
真鍋一史（2009）「『宗教意識』の構造――日本とドイツにおける国際比較――」『関西学院大学社会学部紀要』第 107 号.